

あたりらしい再出奔

去年、ウランパトルでの寒さを体験したためか、この二月のモスクワを去るといふ噂は流布された。私は今回、ソ連科学アカデミーの招待で二週間、ソ連の中国研究者と交流してきたが、ちょうど中国では「遣派派」批判が激発したこともあって、周恩来なき中国へのソ連の関心はいやがうえにも冷まってきた。

周知のように、今日、中ソ対立はまさに中ソ冷戦とみなし得る状態になっており、双方とも激しい非難をぶちまけているが、だからといって、ソ連の中国研究がすべて政治的なプロパガンダに堕してしまっているなら大間違いである。もとより、ソ連の研究者のなかには、依然としてステレオタイプの教条をふりまわす者、ソ連の政策がすべて正しいといわんばかりの政治主義的な論調に終始する者も少なくはない。しかし、全般的にソ連の中国研究がきわめて水準の高い成果を蓄積しているのは、そのような業組を度みだしていても、学者のなかには、真摯(しんし)とした学問的態度で問題をリアルに考えようとする人びとがかなり多いことも事実である。



一つの例として、最近邦訳も出たウラジミロフの『中国特別区』(邦訳名は「延安日記」)をとりあげてみよう。毛沢東主義批判の立場からするソ連の中国研究の新しい傾向として、中国農民運動の指図者としては毛沢東よりも海

王明のメモリアルやコミンテルンの中国アドバイサー、オットー・ブラウン(李徳)の手記なども、そのような立場から中国革命史を再検討するために出された評判の出版物である。ソ連の学者な

学術情報研究所を訪ねて

ソ連の中国学界と中国像

高水準の成果を蓄積

友好再来は予測せず



中嶋 嶺雄

〇年代の中ソ論争時代と大きく変転する試練にさらされてきたのであるが、社説と非難の両極に動いた二期の中国研究への反省のうえに七〇年代の今日、新たな再出奔を告げ、伝統あるソヴェト東洋学を基礎にいまや現代中国学がき

わめて重要な学問分野になっていくといえよう。そこに、深刻な中ソ対立を背景とした国家的要請があることは疑いないけれども、そうであればこそ、本格的な中国研究が必要なのであり、哲学、歴史、経済学、政治学、社会学、国際関係論などの各学問分野を貫く学際的な共通項として現代中国学がクローズアップされてきているのだといえよう。

世界一の規模誇る  
日本の動向に注目  
ところで、ソ連の中国学界は、このように系統的・組織的な研究体制を保持しているけれども、中国の現状にかんする第一次の資料や文献については隔靴掻痒(かき)かかそう(そう)の感がないではない。それだけに日本の研究動向や中国情報に注目が集まっており、このことについては季刊誌「極東

今回、私を招いてくれた社会科学学術情報研究所は、科学アカデミーのいくつかの研究所のみならず、もっとも新しく大規模なものである。このユニークな研究所は一九六九年に中国研究者のデレニーン氏(現東洋学研究所中国部長)を所長として創立され、五年間の草創期を経て一昨年モスクワ大学の近くに郊外の一角に超近代的なビルを新設して移り(所長は経

てはいたが、学術情報研究所の中野圭三氏やリリコエフ氏(モスクワ大助教授)や私を本誌にインタビューしてくれた下ノウエリフさん、それに極東研究所のチェレフコ氏などが私の著作について実に詳しく知っているのは驚かされた。

このよう云事情もあって、モスクワ滞在中の私のスケジュールはきわめてきりしいものであったが、今回改めてソ連の中国研究者とひびきを交えてみて、彼らの多くは五〇年代の古きよき時代の中ソ友誼の時代を懐かしみ憧憬(こうけい)しながら他方では毛沢東以後の中国の變化に大きく注目してはいるものの、中ソ友好のルネサンスが再来すると考えている者はもはや一人もいなかった。

私は今回、中ソ関係史の第一人者で現在はいずれ外務省極東第一部長としてクロムイコ外相のもとで中国政策を立案しているカーロフ氏(モスクワ大学教授)とともに夜、一九八〇年に期限切れとなる中ソ友好同盟条約をどうするか、など中ソ関係の諸問題をじっくりと語りあった。また孫文研究で知られる中国学界の大御所チイフワンズキー氏(科学アカデ

現代中国学(東京語大助教授)